

# 東京五輪がやる

## お家芸に成長 日本バドミントン

# 女子複の「一番手」ナガマツ

京五輪では末綱  
聡子、前田美順



2019年BWF世界バドミントン選手権大会女子ダブルスで金メダルを獲得した永原和可那(左)・松本麻佑ペアと銀メダルの廣田彩花(左)・福島由紀ペア  
(スイス・バーゼルで=写真提供:Gettyイメージズ)

日本オリンピック委員会(JOC)の山下泰裕会長は東京五輪での日本の金メダル目標を30個とした。これはかなり高い目標で達成はなかなか難しそうだが、「お家芸」といえる柔道やレスリングと並ぶ日本の看板競技に成長したのがバドミントンである。

昨年の世界選手権で日本は男女シングル、同ダブルス、混合ダブルスの全5種目でメダルを取った。金2、銀3、銅1の計6個のメダル獲得は前回大会に並ぶ最多タイとなり、いまや世界トップの実力を誇る強国となった。その礎を築く上で大きな役割を果たしたのが、韓国出身の朴柱奉(パク・ジ

# 本番に間に合うか無敵の桃田

ユボン)氏だ。1992年バルセロナ五輪男子ダブルスの優勝者で、2004年から日本代表チームを指導している。彼なくして、いまの日本バドミントンは語れないだろう。

特に自らも得意としたダブルスの指導には定評があり、東京五輪では女子ダブルスの金メダル確率が高い。昨年の世界選手権では日本勢同士の決勝となり、「ナガマツ」こと永原和可那、松本麻佑組(北都銀行)が「フクヒロ」こと福島由紀、廣田彩花組(アメリカンベイプ岐阜)を破って優勝した。

日本の女子ダブルスは小椋久美子、潮田玲子組が「オグシオ」という愛称を付けられてアイドルとなり、08年北

組とともにベスト8入り。続く12年ロンドン五輪で藤井瑞希、垣岩令佳組が初メダルとなる銀を獲得した。そして16年リオデジャネイロ五輪で「タカマツ」の高橋礼華、松友美佐紀組(日本ユニシス)が悲願の優勝を果たした。

その五輪チャンピオンが東京の代表争いで苦戦しているのだから日本の強さは本物だ。代表は世界バドミントン連盟(BWF)が発表する4月28日付の世界ランキングで決まる。各国・地域の出場枠は各種目とも2が最大。日本勢ではナガマツとフクヒロがリードし、2組に差をつけられたタカマツが必死に追っかけている。新型コロナウイルスの流行でポイントを取るための国際大会が中止や延期になると、タカマツはさらに苦境に立たされるわけだ。

女子ダブルス以上に金メダルが期待された男子シングルの桃田賢斗選手(NTT東日本)は、今年に入って交通事故というアクシデントに見舞われた。1月のマレーシア・マスターズで優勝。帰国のためクアラルンプール国際空港に向かっていた高速道路で追突事故にあった。当初の診断は全身打撲などで全治6週間。帰国後の検査でもそれ以上の異常は認められず、2月3日から日本の代表合宿に参加するという順調な回復ぶり。復帰戦は3月の全英オープンが設定された。

ところが代表合宿で本人が「シャツが二重に見える」と訴えた。あらためて精密検査を受けたところ右目の眼窩底骨折が判明し、手術を受けた。全治約3か月の見込みで、復帰へのスケジュールも全くの白紙に戻ってしまった。

桃田選手は16年春に違法賭博問題が発覚し、リオ五輪出場を棒に振った。だがその反省を生かして精神面、技術面で大きく成長。18年の世界選手権男子シングルスで日本勢初の優勝を遂げ、世界ランキングも1位となった。さらに昨年は世界選手権で2連覇を達成し、12月のワールドツアーファイナル制覇を含めて史上最多の国際大会年間1勝をマークした。BWFが昨年暮れに発表した桃田選手の年間獲得賞金は史上初めて50万ドルを超える50万6900ドル(約5600万円)と名実ともに世界トップ選手となった。

地元開催の東京五輪へ向けて、唯一の心配はけがという状況で五輪イヤーを迎えた矢先の負傷。しかもプレー中のものではなく、思いもよらぬ事故故のもの。実戦復帰は5月以降となり金メダルへの道は厳しいものとなった。何とかベストの状態に戻して本番を迎えてほしいと願うばかりだ。(後藤英文)

後藤英文 ● どう・ひでふみ  
スポーツジャーナリスト。共同通信社で初代スポーツ専門特派員として1985年秋から2年間ニューヨークで勤務。MLBワールドシリーズやW杯サッカー、NFLスーパーボウルのほか、夏の五輪などを取材。2013年から5年間、びわこ成蹊スポーツ大学の教授を務めた。